

文京ふるさと歴史館

BUNKYO MUSEUM NEWS

# だより

第10号/平成15年4月1日発行

樋口一葉と明治の菊坂	2
収蔵庫探検室 『絵本江戸土産』と花の時代	4
和紙をめぐる文化—文京紙漉史考—	6
平成14年度のあゆみ	7
資料をご寄贈くださった方々	8
平成15年度の催し	8





## 樋口一葉と明治の菊坂

昨年、平成16年に発行される新五千円札に樋口一葉の肖像が使われることが発表され、大きな話題になりました。紙幣の肖像に女性が選ばれるのは初めてのことで、今でも一葉が人気のある作家であることが証明されました。一葉は24歳の若さで亡くなりましたが、約10年間を本郷の地で暮らし、多くの作品を生み出しました。文京区と関わりのある数多い作家のなかで、もっとも重要な作家だといって過言ではないでしょう。

当館では、平成15年秋に樋口一葉をテーマにした特別展を開催します。そのなかでは一葉に関する資料を展示しながら、一葉の生涯や暮らした街を紹介する予定です。本稿ではその概要を素描したいと思います。

### 一葉の生涯

まず最初に、一葉の生涯を文京区との関わりを中心に追ってみましょう。一葉は、明治5年（1872）3月25日に東京府内幸町（現・千代田区）で生まれました。本名は奈津。父則義は甲斐国山梨郡中萩原（現・山梨県塩山市）の農民出身で、江戸に出て、御家人株を買って幕臣となりました。一葉が生まれたのは幕府が倒れてから4年経った時期で、旧幕臣たちの多くは生活に困っていました。しかし、則義は東京府の官吏として再就職できただけでなく、不動産の売買や金融業で成功し、比較的安定した生活を送ることができたようです。

樋口家が本郷に移り住んだのは、明治9年4月、一葉4歳の時でした。場所は本郷六丁目5番地（現・本郷五丁目26番4号）で、今と同じく、旧日光御成道（現・本郷通り）を挟んで向かい側には赤門（旧加賀屋敷御守殿門）、西隣には法真寺（浄土宗）がありました（図-①）。樋口家の庭には桜の木があり、後年、一葉はここを「桜木の宿」と呼んで懐かしんでいます。

明治14年7月に下谷区御徒町（現・台東区）に転居しますが、明治23年9月に再び本郷に戻ってきました。今度の住所は菊坂町70番地（現・本郷四丁目32番）でした（図-②）。菊坂町には明治26年7月まで暮らしました（途中、町内で1回転居）。安定していた樋口家の生活も、則義の事業の失敗や則義と長兄泉太郎の死によって、苦境に陥ることになります。そして一葉は戸主として一家を支える立場になり、針仕事や洗張りなどで生計を立てました。その一方、14歳から通い始めた中島歌子の歌塾「萩の舎」で和歌を学び、上野にある東京図書館に足しげく通って本を読みあさりしました。「東京朝日新聞」の

小説記者、半井桃水と知り合い、小説の指導を受けるようになったのもこの頃です。一葉にとって、菊坂で暮らしていた頃は、作家となるための修業時代だったといえます。

明治26年7月に下谷区竜泉寺町（現・台東区）に転居しますが、1年も経たずに本郷に戻ってきます。明治27年5月から暮らした



樋口一葉肖像 晩年に撮影されたといわれている

丸山福山町4番地（現・西片一丁目17番8号）が終焉の地となりました（図-④）。この時期、一葉の才能が開花し、「たけくらべ」「にぎりえ」「大つごもり」など、後に代表作となる作品を次々と発表しました。著名な作家たちも一葉の非凡さを認め、一葉の自宅に通って交流を深めました。なかでも、森鷗外・幸田露伴・斎藤緑雨は雑誌『めざまし草』で行っている「三人冗語」という新作批評に、一葉にも加わってもらうことを切望しました。「三人冗語」を「四つ手あみ」と変えることまで考えていたようですが、一葉が断ったため実現しませんでした。

作家としての絶頂期を迎えたにもかかわらず、一葉は病魔に冒され、明治29年11月23日、24年余りの短い生涯を閉じました。

### 一葉が暮らした街 菊坂町

一葉は本郷の3つの町で暮らしました。そのうち、修業時代を過ごした菊坂町について紹介しましょう。菊坂町という名は、町を通る坂道から付けられました。菊坂は現在、本郷通り沿いにある文京センタービルの脇から、西片の台地の下へ緩やかに下っている坂を指しますが、最初は今の胸突坂（本郷五丁目9番と33番の間を通る急な坂）を菊坂と呼んでいました。

江戸時代後期に作成された地誌『御府内備考』によれば、菊坂という名は、長祿年間（1457～60）、本郷周辺に町屋ができてきた頃、この辺りに菊畑があり菊を栽培する人が多かったことから付けられたようです。しかし、菊畑があった当時の資料（古文書や絵図）が残っていないため、くわしいことは明らかではありません。

江戸時代には菊坂の付く町名は3つありました。菊坂（現・胸突坂）の上側（東側）が菊坂台町、下側（西側）が菊坂町、そして菊坂町の北西に隣接する一角が菊坂田町と名付けられました。しかし、明治5年に菊坂台町・菊坂田町が本郷台町・本郷田町と改称され、菊坂が付く町名は菊坂町のみとなりました。

先に紹介したように、一葉は明治23年から26年にかけて菊坂町で暮らしました。残念ながら、一葉が暮らした時期の様子はわかりませんが、その前後の資料から菊坂

町がどんな街だったのかを探ってみましょう。

まず、『東京府志料』によって、菊坂町には明治5年当時で、209軒の家があり、816人が暮らしていたことがわかります。209軒の内訳は、士族39、僧侶10、平民160です。男女の数はほぼ同じでした。では、菊坂に住んでいた人たちはどのような職業に就いていたのでしょうか。『新撰東京名所図会 本郷区之部』（明治40年刊）には、寺院の他はほとんど商家で、東京大学が近かったために下宿屋が繁盛していた、と記されています。代表的な下宿屋としてあげられているのは、富士見軒・常磐館・富士館・赤心館です。なかでも赤心館は、上京したばかりの石川啄木が、明治41年5月から4か月間暮らした下宿として知られています。

また、旅館では菊富士楼（現・本郷五丁目5番16号オルガノ（株敷地内））が有名でした。菊富士楼は明治29年に下宿屋として創業され、大正3年（1914）の東京大正博覧会開催を機に建物を増築し、外国人向けの菊富士ホテルとして生まれ変わりました。しかし、利用客は外国人よりむしろ作家や芸術家が多く、菊富士ホテルは彼らの創作活動の拠点となっていきました。このようにして、菊坂町には学生や作家・芸術家が集い、文化的風土が築かれていったのです。

## 一葉ゆかりの 旧伊勢屋質店

現在の菊坂周辺に、明治時代の街並みを見ることはむずかしくなっています。そのなかで唯一、明治時代の様相を残しているのが旧伊勢屋質店です（図③）。伊勢屋は万延元年（1860）に創業し、昭和57年（1982）に廃業するまで120年以上



旧伊勢屋質店（国・登録文化財）

にわたって質店を営みました。生活費に困った一葉がたびたび利用したことでも知られています。一葉は菊坂町に住んでいた時期だけでなく、遠方の竜泉寺町に住んでいた時にも利用しました。一葉と伊勢屋の間に金銭貸借の関係だけでなく、人間的な交流があったことがうかがわれます。

伊勢屋の建物のなかでもっとも古いのは土蔵で、明治20年に南足立郡鹿浜村（現・足立区鹿浜）から移築されたものです。おそらく一葉が預けた質草もこの土蔵で保管されたのでしょう。また、蔵の裏手にある座敷は明治23年、店舗は明治40年の建築で、いずれも明治時代の商家建築の形式を残しています。旧伊勢屋質店は、一葉が通った当時の面影を今に伝える貴重な史跡といえます。

樋口一葉の作品は、明治時代から今に至るまで読み継がれ、多くの人に親しまれています。その一方、一葉がどこに住み、どんな暮らしをしていたのかはあまり知られていないことでしょう。今年度の特別展では、暮らした街にも注目しながら、一葉を紹介してみたいと考えています。（星野尚文）

### 【参考文献】

- 『樋口一葉の世界』  
山梨県立文学館、1990年
- 『樋口一葉・資料目録（改訂増補版）』  
台東区立一葉記念館、2001年
- 『一葉の四季』  
森まゆみ著、岩波新書、2001年
- 『ぶんきょうゆかりの樋口一葉』  
戸畑忠政編著、文京区教育委員会、  
2002年



## 収蔵庫探検室

# 『絵本江戸土産』と花の時代

## 『絵本江戸土産』とは？

『絵本江戸土産』は、嘉永3年（1850）に初編が刊行され、全10編完結は慶応3年（1867）です。挿絵を描いた初代歌川広重は、安政5年（1858）コレラに罹り死亡してしまい、その没後は二代広重によって引き継がれたといわれています。以下に各編の担当を表にしました。

編	画家	序文	年代
初編	初代広重	松亭金水	嘉永3年秋
二編	初代広重	松亭金水	嘉永3年夏
三編	初代広重	松亭金水	嘉永3年秋
四編	初代広重	初代広重	嘉永3年冬
五編	初代広重	松亭金水	刊年不明
六編	初代広重	松園梅彦*	刊年不明
七編	初代広重	松亭金水	安政4年（1857）
八編	二代広重	松亭金水	文久元年（1861）秋
九編	二代広重	柳邇門主水春水	文久元年（1861）秋
十編	二代広重	箭浦逸人	慶応3年6月

\*当館蔵本には欠。

各冊の大きさは縦17.8cm、横12.0cmの小本で、全て彩色刷り。出板を手掛けた本屋は金幸堂で、本書の刊行目的は、初編の序文で戯作者、松亭金水（1797～1862）が述べる通り、「遠国他郷」つまり都市江戸にやって来る遠い他国からの様々な階層の人々（参勤交代で赴任して来た武士であったり、伊勢参りに行くついでに江戸を通る旅人であったり、仕入れに来た商人であったり）が、江戸に来た記念に持って帰れる土産になれば幸いとしています。同じように名所を描く書物として有名なものに『江戸名所図会』がありますが、これと比較してまず気がつくのは、第一に全体の名所の数が少ない、第二に文章が少なく絵が主役である、第三に神社仏閣についての記述が少ない、この3点が挙げられます。絵も文も読ませるタイプの『江戸名所図会』と違って、本書は絵が主役なのだから、大寺院の一つ一つの細かい塔頭や境内社、由来まで事細かに記す必要がないのです。護国寺を例にとると、『絵本江戸土産』（図1）には2回ほど登場し、割いた紙数は2丁（4頁分）、『江戸名所図会』（図2）では4丁半（9頁分）、文章を含めれば6丁半（13頁分）となります。

これらの書物に先行するものに、西村重長著『江戸土産』（宝暦3年・1753刊）と鈴木春信著『続江戸土産』（明和5年・1768刊）があります。これらの挿絵はそれ

なりに楽しめるものなのですが、どちらかといえば風俗に重きを置いているので、自然、人物にズームアップした画題が多く見てとれます。その点『絵本江戸土産』は、風景画を得意とした広重にふさわしく、雪の湯島天満宮、春の飛鳥山など最も美しいと思われる季節を選び、色刷りの利点を生かして一枚の絵として完成度の高い挿絵をのこしています。その代わり



図1 『絵本江戸土産』護国寺（9編） 館蔵

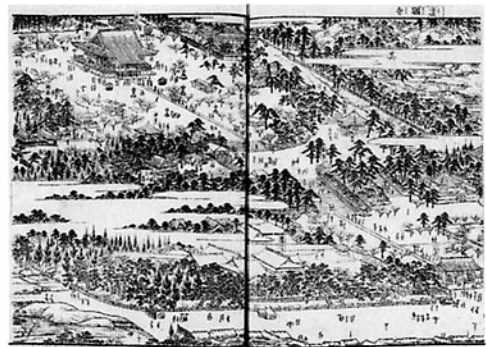


図2 『江戸名所図会』護国寺 館蔵

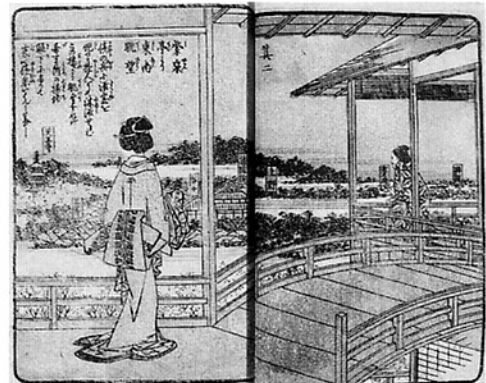


図3 『絵本江戸土産』紫泉亭より東南眺望（7編）

人物は添えもので、団子坂にあった植木屋が開設した茶屋、紫泉亭から上野方面を眺める図（図3）などは珍しく人物が大きく描かれているのに、おそらく若い女性であるその人物は後ろ向きで顔を見せてくれません。

さて、本書は、平成12年度特別展『版になった風景—文京名所案内—』や14年度特別展『菊人形今昔—団子坂に花開いた秋の風物詩—』に展示したので覚えている方も多いかと思われます。前者では、文京の名所を描いた作品として紹介し、後者では団子坂に「花屋敷」を開園し、菊細工の中心人物でもあった楠田右平次という植木屋に注目しました。19世紀に入ると植木屋は、寺院や武家屋敷の造園だけでなく、本草家のアシスタントとして有能ぶりを発揮し、菊細工を自分の庭だけでなく、両国など繁華街に見世物として興行するなど、多彩な活動を繰り広げます。その代表的人物が、楠田右平次でした。また、彼のライバルとして忘れてならないのが「浅草花





図4 『絵本江戸土産』  
奥山花屋舗百草の園 (7編)

屋敷」を開園した森田六三郎です。二人とも団子坂の両脇の植木屋であり、2つの花屋敷が嘉永5年(1852)春と、これまた同じ年の開園でした。2つの花屋敷の開園の季節からもうかがえるように、後に「花屋敷」と称されるようになりますが、始まりは梅林だったことも注目に値します。両者の花屋敷は、『絵本江戸土産』では複数の場面に描かれています。そのほか、四谷新町の梅園や小村井梅園

など梅の名所が、類似の書物、『江戸名所図会』『江戸名所花暦』などより多く掲載されます。これは、19世紀後半になると、新しい梅園が多数開かれ、これらを新名所として積極的に紹介したことを物語ります。現在、新しい名所、例えばユニバーサル・スタジオ・ジャパンが完成するにあたり、ここを観光地化するためにテレビ・ラジオ・インターネットなど様々な広告を媒体に宣伝活動をします。これと同じように、繁華街として名の通った浅草とは違って今一つ知名度が低い、団子坂という片田舎に出来た花園やそこの茶亭を知ってもらうためには、この時代の有効な宣伝媒体、書物や錦絵を利用しなければなりません。団子坂の花屋敷は、開園当初こそ物珍しさのため賑わいましたが、1年もしない内に閑古鳥が鳴くようになったそうです。このマイナーな名所を、当代随一の画家、広重に描いてもらうために、楠田右平次はいくばくかの金銭を払ったに違いありません。現在の広告料です。広告料支払の直接の史料は見つかっていませんが、楠田右平次という植木屋が、絶景を宣伝にした風呂もある茶亭を設け、そこで高価な盆栽を販売し、菊人形を何点も出品した、植木職人というよりやり手の商人だったことを考えれば、当然予測できます。

『絵本江戸土産』は、梅以外の植物、富岡八幡宮の牡丹や隅田堤の桜などにも紙幅を多く費やしています。前に風景画を主とした書物と述べましたが、画家広重が好んだのは、花のある光景だったことが知られます。もちろん他の要素、寺院の荘厳、眺望の素晴らしさ、雪景色なども重きをなしていますので、花だけに偏っているわけではありません。しかし本書に描かれた名所のべ245箇所のうち、花屋敷のように重複して描かれる名所には、飛鳥山、御殿山、上野の桜など花名所が多いことから、行楽に出かけるためのガイドブックとしての機能を果たしたとうかがい知れます。本書は江戸名所の絵でもありますが、それ以上に江戸の花を描いたもの、つまり花暦としての側面も注目されているのではないのでしょうか。

## 花暦と『武江産物志』

花暦は、文政10年(1827)刊『江戸名所花暦』が初版から何度も版を重ねたベストセラーであったため、この書物のみが最も有名ですが、これ以外にも花暦は数多く作られています。『花信風』は『江戸名所花暦』より以前に成立した桜だけの花暦ですし、『嘉永二己酉花暦』は、「毎年改」とあり、毎年のように花暦が出版されたようです。安政5年(1858)の序がある『花鳥暦』には、季節ごとの俳諧を載せ、俳人の手による花暦と知られます。

こうした花名所を紹介したのは、画家・文人だけではなく、本草家といわれた、今でいうナチュラルリストたちも同様でした。根津神社裏(現・台東区谷中二丁目)に居を構えた岩崎灌園(1786~1842)は、日本最初の本格的な植物図鑑『本草図譜』の作者として有名ですが、彼は、文政7年(1824)に序文がある『武江産物志』を著しました。いわゆる名木といわれていたもの、亀戸天神の「臥龍梅」や利根川の「ばらばら松」など広重が「名所江戸百景」や『絵本江戸土産』で描いた樹木も多く載せ、『江戸名所花暦』にはない樹木も載せています。本書は書名からもうかがえるように、武蔵国江戸の産物を記録することを目的としています。江戸時代中期、享保・元文年間(1716~41)に八代将軍吉宗の命によって全国の産物調査が実施され、産物帳が国毎に提出されました。この原本は全て失われ、写本が部分的に残っていますが、残念ながら江戸のものはありません。そのため、文政年間の『武江産物志』は、江戸の自然誌を考える上で第一級の史料なのです。

本妙寺坂上(現・本郷四丁目)に明治以降に居を構えた伊藤圭介は、明治4年刊行『日本産物誌』の「武蔵部」で『武江産物志』から多く引用しますが、名木類に関しては全て省略しています。彼ら本草家は、画家や文人が画題や詩文の材料を探すために花名所をめぐるのと異なり、自然物が現在または過去にどのように分布している(た)かを主目的としているので、今私たちが普通に愛でる植物とは異なる、いわゆる薬草と呼ばれるものを調査しました。彼らの地道なフィールドワークによる調査記録が、後の植物学発展に多大な影響を与えました。

しかし、江戸に住み、江戸時代に生きた岩崎灌園は産物として、江戸の名木を記す必要性を感じたのでした。彼は、住まいこそ台東区ですが、薬園を富坂に設けてここで薬草を栽培しました。伊藤圭介は、明治維新の後、小石川植物園(現・東京大学附属植物園)に勤務し、日本最初の理学博士として名を馳せました。奇しくも江戸・東京の産物を紹介した2人が、文京ゆかりの人物であることにちなんで、平成15年度の学習企画展は、本草家たちの事蹟を紹介する予定です。(平野 恵)

【参考文献】

『武江産物志』上野益三著、井上書店、1967年

## 和紙をめぐる文化 — 文京紙漉史考 —

近年の古いモノを見直し新しい生活に取り入れるという流行にともない、和紙もさまざまなインテリアや小物などに利用されるようになってきています。和紙はいつ頃からわたしたちの暮らしのなかに用いられてきたのでしょうか。

和紙、すなわち紙漉きの歴史は古く、大陸の紙祖伝承にも諸説あるようですが、日本でも奈良時代には紙が漉かれていたようです。また和紙の産地にもさまざまあり、越前和紙・石州和紙など枚挙にいとまがありません。では東京はどうだったのでしょうか。

東京の紙漉きは江戸時代に始まりました。その当時有名だったのは浅草（台東区）で通称“浅草紙”と呼ばれていました。江戸時代初め頃の文献には紙漉きが「浅草名物」と記されています。東京の各地で紙漉きがみられるようになるのは江戸時代の末頃ですが、文京区でも紙漉きが行われていたという記録があります。明和5年（1768）に出版された『絵本続江戸土産』の「関口村」の図には、漉いた和紙を板に張付けて乾かしていると思われる絵が左下部に描かれています（図1）。また、天保12年（1841）の『御免御触書集覧』には、紙漉職人の所在地として根津門前町・関口水道町・音羽町の名が記されています。そしてこの紙漉きの技術を文京に伝えたのは信濃国（長野県）の紙漉職人たちでした。

天保4年（1833）、水引や元結の原紙を漉く職人の久保田増平は、現在の長野県飯田市から新宿区高田馬場に移り住み紙漉きを始めました。続く嘉永3年（1850）にはこの久保田を頼り中島金作と今村市蔵が江戸に出て来て、久保田の元で紙漉きの修業をしました。その後、二人は安政年間（1854～60）に音羽（文京区）へと移りました。まさにこれが文京区の紙漉きの始祖となります。この久保田増平とその妻とみの墓が新宿区牛込地域の寺院に祀られ、紙漉きに縁の深かったことから、いずれの

戒名にも「楮」の文字が使われているといえます。中島は紙煙草入用の地紙を漉いていたといい、日本橋馬喰町（中央区）の袋問屋に品物を卸していました。安政3年（1856）の年号の入った「下地漉立仲間」の看板も残っているといえます。今村は自宅で楮の栽培までも行うほどの熱心な職人で、音羽地域の氏神である今宮神社（音羽一丁目4番4号）にも今村の名入の玉垣が奉納されています。さらに今村と紙漉きの関わりを示す資料として、日鷲神社についてのものがあります。日鷲神社は、紙祖神として信仰されている天日鷲命を祀った神社で、茨城県の鷲子山上神社・山口県の楮祖神社・徳島県の忌部神社など、同様に祀られたものが全国各地にあります。資料は音羽に日鷲神社を創建することに関するもので、明治8年（1875）の日鷲神社を祀ることになった経緯を紙の起源から説明した「紙始之由書」をはじめとして、同年の「紙祖神社一祠營造願」など多数が残されています。特に明治17年の「日鷲神社本社再建控帳」には裏表紙に「紙祖神発起人 今村市蔵」と記されています。この日鷲神社は現在も今宮神社の境内にあり、文京区の紙漉きの歴史を偲ぶことができます。

明治時代になると文京の紙漉きはさらに盛んになり、明治5年の『東京府志料』や明治8年の『東京府誌』には、紙漉きの行われている場所として東・西青柳町や音羽の地名が記されています。また明治14年の『東京府統計表』には本郷区7戸・小石川区76戸の紙漉戸数があげられています。この当時の紙漉きの隆盛を示すものとして、明治40年に出版された『新撰東京名所図会』があります。「音羽町抄紙場の図」と題された挿絵には、大勢の人びとが働く紙漉場の様子が賑やかに描かれています（図2）。大正時代には手漉和紙から機械漉和紙へとその主流が移行し、中島・今村らも明治の終わりには手漉きによる紙漉業を廃業しています。その後、機械和紙産業はさらに発展し、戦前まで展開していくことになるのです。

文京区にはこの和紙の伝統を今に伝える伝統工芸が現在でも数多く残っています。江戸唐紙・江戸提灯・江戸表具・江戸千代紙・木版画などがそれで、新しい感覚を取入れながらもそのなかには古き良き伝統技術が継承されています。伝統工芸のなかにも文京区の紙漉きの歴史をみることができるのです。（田中 斉）

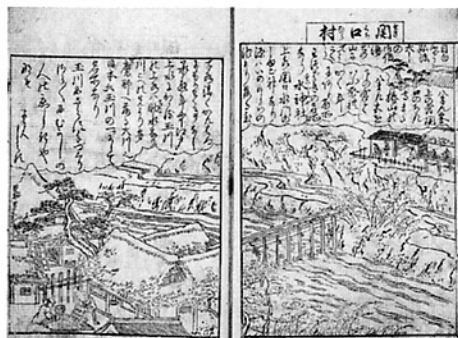


図1 『絵本続江戸土産』関口村 館蔵



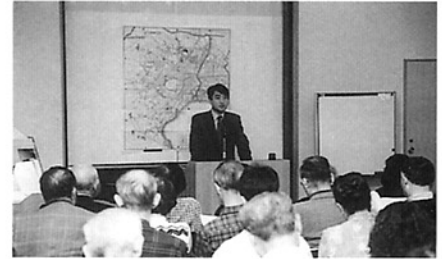
図2 『新撰東京名所図会』音羽町抄紙場の図 館蔵

# 平成14年度のあゆみ

## 区民大学・文京の歴史講座

「江戸の大名屋敷」(全5回)

- ◆5月12日(日)「加賀屋敷の内と外」  
／宮崎勝美氏(東京大学史料編纂所教授・文京区文化財保護審議会委員)  
参加者数……98人
- ◆5月19日(日)「加賀藩本郷邸の発掘調査」  
／堀内秀樹氏(東京大学理蔵文化財調査室助手) 参加者数……79人
- ◆5月26日(日)「藩邸と都市社会—榊原家池之端屋敷を中心に—」  
／岩淵令治氏(国立歴史民俗博物館助手) 参加者数……95人
- ◆6月2日(日)「江戸における大名の暮らしと庭」  
／原 史彦氏(東京都江戸東京博物館学芸員) 参加者数……85人
- ◆6月9日(日)「徳川御三家の江戸屋敷—尾張家を中心に—」  
／渋谷葉子氏(学習院大学史料館特別研究員) 参加者数……82人

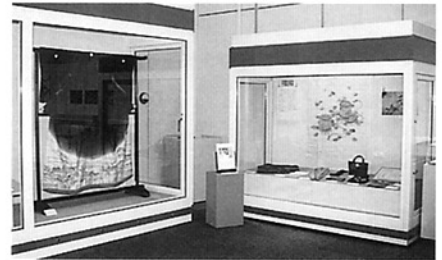


文京の歴史講座(5/12)

## 伝統工芸展

「文京の匠たち—染織・その心と技—」

- ◆6月22日(土)～7月14日(日)(延べ19日間)  
入館者数(製作実演参観者・工房見学会参加者を含む)……1,180人
- ◆製作実演 7月4日(木)～7月7日(日) 参観者数……335人  
染色／荒井里美氏、手描友禅染／木島壽子氏、東京手描友禅／岡川延美氏
- ◆工房見学会(根津界限)  
6月29日(土) 参加者数……19人  
7月13日(土) 参加者数……15人



伝統工芸展(会場風景)



伝統工芸展(工房見学会)

## 小・中学生のための歴史教室

「調べてみよう 文京の遺跡を—君も一日考古学者—」

- ◆第1回 8月17日(土) 野外調査(発掘) 会場:文京区立窪町小学校  
参加者数……23人
- ◆第2回 8月24日(土) 室内調査(遺物洗浄) 会場:スポーツセンター  
参加者数……17人
- ◆第3回 9月7日(土) 野外調査(測量) 会場:富士神社 参加者数……8人



歴史教室(発掘)

## 特別展

「菊人形今昔—団子坂に花開いた秋の風物詩—」

- ◆10月12日(土)～11月24日(日)(延べ37日間)  
入館者数(講演会・造形講座参加者含む)……6,317人
- ◆記念講演会 会場:文京区男女平等センター  
10月19日(土) 「菊人形のはなし—その歴史と展開—」  
／川井ゆう氏(武庫川女子大学・阪南大学非常勤講師) 参加者数……57人  
10月26日(土) 「都市型植木屋の誕生—幕末から明治—」  
／平野 恵(当館文化財調査員) 参加者数……53人  
11月9日(土) 「菊人形は面白い?面白くない?—江戸・明治のつくりもの文化—」  
／木下直之氏(東京大学助教授) 参加者数……51人
- ◆菊に親しむ造形講座—現代の「菊細工」に挑戦!—  
会場:文京区男女平等センター  
／横内 葵氏(日本トピアリー協会認定上級デザイナー)  
11月15日(金) 一般コース 参加者数……13人  
11月16日(土) 小・中学生とその保護者コース 参加者数……21人  
11月17日(日) 一般コース 参加者数……8人



特別展(会場風景)



特別展(菊人形・菊の付け替え)